

会頭講演

## 胃腸からみた漢方と中医学の心身医療

香港浸会大学中医药学院 主任中医師

戴昭宇

胃病（消化器系疾患を中心）の診療がきっかけである。30数年前、中医消化器内科において多様な胃腸のトラブルを患った病人達と接しているうちに、彼らの病因と症状には、情志（精神情動）関連要因の多さと重さを、ますます痛感するようになっていた。

「胃腸は情緒の鏡」と謂われるよう、これまでの研究によると、多くの患者達が悩まされている機能性消化管疾患の40%～60%は、心身症の範疇に属しているとみられる。そのうち、腹痛や痞満などの愁訴が現れたり、または機能性ディスペプシア（FD）、過敏性腸症候群（IBS）といったような病名を診断されたりした患者群は、心理社会的ストレスと大いに関わっている者が多いことも広く知られている。この分野の治療では、西洋薬の限界が目立っており、認知行動療法などの心理療法、漢方・中医药ならびに鍼灸治療の効果、そしてマインドフルネス、気功や瞑想なども含め、医療界ならびに患者からの注目とアクセスが増えている様子である。

一方、腹部の膨満感に属し、その30%～80%の発生が心因と関わっているとみられる「痞満」といったポピュラーな症状の診療だけを取り上げても、中医学と漢方の視点から考察してみると、問題点が依然として多い。

ここに「心下痞」（胃痞）を例とし、『傷寒雜病論』に出典した瀉心湯類方の治効機序、また瀉心湯の方剤名称と治効との関連、瀉心湯類方の間を貫いた黄連など生薬の役割、人参・甘草・大棗など甘味薬を中心に応用する是非、そして瀉心湯類方の日中両国における江戸時代から今日までの方意解析および臨床応用の比較、薬理学的研究の見解をまとめ、瀉心湯は「心」と胃腸の両方から、しかも心因とかかわる「心下痞」（胃痞）を治療する方剤であるとの結論を導いている。

近年、腸内フローラと脳腸相関に関する研究は、消化器領域に限らず、医学界の最先端を走り続けている。日中両国を見回わすと、「腸脳」「腹脳」と似た観念が、昔から中医学または漢方、そして日中両国の伝統文化の中に存続している。とくに、胃腸を調和する方剤群とみられた瀉心湯類方には、心下痞と吐き気、下痢などの身体症状の改善のみではなく、不眠、不安、狂躁状態、そして夢遊病や癲証など多彩な精神・情動の異常に対する治療も数多く蓄積してきた。

日本では長い間、「生物医学」を優位とされた「身体科医療」の全盛な時代でしたが、最近「心療内科」の標榜が増え、保険診療におけるストレスの管理と心の持ち方を含めた生活指導も課されるようになったことが、心身を共に重視しなければならない心身医学の必要性を示唆していると感じている。

一方、40年前から改革開放を踏み出した中国では、社会環境の激変によって情動的ストレスが急増し、心身症、神経症、精神疾患などの発症への対応、そしてキュアからケアへの転換などの問題も社会的関心を強く集め、心身一元論に立脚した古き新しい中医心身医学に対する期待も高まっている。

## 【結論】

1. 心下痞の治療に関する瀉心湯類方の中日両国における応用の考察を通じて、これまでの中国側は主に身体症状に着目して瀉心湯の類方を応用しているが、江戸時代以来の漢方診療では不眠、不安、狂躁、夢遊、癇証などの精神・情動異常に対する応用が目立っている。
2. よく心身症の一身体化症状として現れる心下痞からの診療を考えれば、吐き気や下痢、または便秘、腹痛、頭痛などの従来「身体症状」とみられたものに対しても、改めて「形神一体」「心身一如」といった中医学と漢方の心身を共に重視する立場から、それらの病因病機と心身との対応を再検討すべきである。中医心身医学の発展の道はまだまだ長いし、中医学と漢方の両者にとっては、お互いに参考し吸収し合うところが多い。
3. 心身医学分野こそ、中医学と漢方、そして東洋医学と西洋医学との間においてお互いに話し合いやすい、補完し合いやすい接点であり、今後の統合医療の基盤およびその主体になれること。また、中医学と漢方の中に内包された東洋の思想と叡知を吸収した心身医学こそ、今後世界医療の発展方向であることを強調したい。